

地平線の彼方まで広がり続ける、緑色に染まった大地に、初夏の風が吹き抜けていく。

爽やかな風を受け、喜ぶように一斉に葉を揺らしていくトマトは、緑色の果実を抱えたまま、熟す期を待ち望んでいく。

広大な畑に大量に植えられたトマト達の一角には、今日も大きな麦わら帽子が見え隠れしていた。

葉の挟間に隠れるように座り込んでいたスペインは、頭上を駆け抜けていく風に麦わら帽子を傾けたが、それを指先だけで直していく。

「風が出てきてもうたなあ…」  
小さく呟いてみても応える者もおらず、虚しく響いたが、それもいつもの日常でしかない。

嘆息じみた吐息を吐き出しながら、のんびり立ち上がったスペインは、そのまま腰を伸ばすように、大きな伸びをした。

草むしりに没頭するあまり、ずっと座り込んだままだったス

ペインは、久しぶりに身長分だけ近くなった空を見上げた夕闇が迫り始めた上空は、すでに薄暗くなり始めていたが、真つ赤に染まっている西の空には、日が沈む前の温かみを感じられる。

日が沈んでしまふ物悲しさを覚えつつも、美しく映える夕焼けは絶景だった。

「今日もトマトみたいやなあ〜」

日中は容赦なく照らす太陽も、この時間だけは、大きなトマトのように見え、嬉しそうに微笑んだスペインは、もう一度大きな伸びをする。

凝り固まった体が伸びをする度に解れていき、風を纏う度に、体中に染みついている土や草木の匂いが、鼻先をくすぐっていく。

遠い昔、血の匂いを充満していた体とは、かけ離れすぎている、もう思い出せなくなつた。

もう一度だけ、大きな夕陽を眺めたスペインは、満足そうに微笑むと嬉々と呟いた。

「明日もええ天気になりそ〜やな〜」

大量にお日様を浴びたトマトほど、美味しい物はないと言

いたげな言動は、今年も順調に育っている喜びに等しかった。

雑草でいっぱいになったカゴを軽く背に担いだスペインは、鼻歌を口ずさみながら、家路へ向かった。

後片付けを終えてから帰宅したスペインは、のんびりした仕事で厚手の軍手を脱ぎ捨てると、手を流水に浸していく。

冷たい水が手の温度を奪っていくようで、心地よくも思えるが、元から几帳面でもキレイ好きでもないからこそ、洗いは雑なものだった。

軽く水を切りながらタオルを探しかけた時、不意に何かに思い当たったように左手を目の前まで持ち上げていく。

農作業に勤しむ手は、お世辞にもキレイとは言えないが、自分の手だと誇る事が出来る。

それでも、遙か昔に痕跡さえも消え失せてしまったものに気付く度に、苦笑いを噛み殺してしまふ。

普段は気にも留めていないにも関わらず、不意に思いだした時だけ感傷的になるのは、未だに痛む想いが心の奥底に

こびり付いているからかもしれない。

しかし、真剣に考えたところで、意味がない事も分かっているからこそ、緩々と手を下していく。

乾き始めている手を無造作拭きとったスペインは、まるで祈るように、胸元に掛けている十字架を、服の上から強く握り締めた。

一時の感情を頭の片隅に追いやりながら台所へ足を向けたスペインは、次第に食べ物の事に思考を切り替えていく。

冷蔵庫に残っていたクロケッタを頬張りながら、シエリー酒を開けるか、ビールを開けるかを悩んだものの、それを押し留めるように、まだ残っている仕事が脳裏を掠める。

仕方なさげにビールに手を伸ばしかけた時、電話の呼び出し音が、室内をけたたましく響き渡っていく。

軽食とは云え、スペインにとっては立派な食事時間でもあり、携帯が普及されてからは、存在さえ忘れそうな家電が鳴っているのは、少しでも新鮮に思える。

そして、この時間を狙ってかけてくるのは、生活習慣を熟知している者に限られるからこそ、相手を予測するのも早かつ

た。

口の中に残っているクロケッタを忙しなく呑み込んだスペインは、軽快な調子で受話器を上げた途端、懐かしい声色が耳元に聞こえてくる。

『よゝ、久しぶりだな』

「ロマーノやん、元気にしてるか？」

予想通りの人物からの電話に、大して驚く事もなく話し始めたスペインだったが、それはロマーノも同じだった。

『一応な：明日とか、ヒマか？』

頻繁に連絡を取っている事もあり、しんみりと懐かしみ合う事もなく、淡々と用件を伝えたロマーノだったが、スペインからの返答は、素気ないものだった。

「あゝ、親分、明日はおらへんわ〜」

申し訳なき気な声で告げるスペインに、落胆を隠しきれなかったロマーノは、嘆息じみた吐息を吐き出しつつも、新たな質問に切り替えた。

『なんだよ、どっか行くのかよ？』

諦めきれない心情をそのまま口にするロマーノに、端から隠す気もなかったスペインは、躊躇なく言葉を続けていく。

「オーストリアの家に行くねんよ」

無意識の内に弾んでいくスペインの声色に、受話器の向こうからは空気を飲み込むような音が、微かに漏れ聞こえてくる。

一呼吸だけ間を空けたロマーノは、ざわつく胸元を押しさえずとも、沈んだ声を隠す事は出来なかった。

『…じゃあ、ムリ、だな』

落胆の色を濃くさせるロマーノだったが、その意味を明確に捉える事も出来ないスペインは、小首を傾けただけだった。

「遊びに来るんやったら、ロマーノも一緒に行ったらええやん」

何でもない事のように平然と言っているスペインに、盛大な舌打ちを吐き出したロマーノは、苛立つ心情を怒声に変えていく。

『行くわけね〜だろ！邪魔者扱いは願い下げだ〜！』

怒りを露わにさせるロマーノに対しても、真意を汲み取れずにいるスペインは、更に首を傾げるだけだった。

「なんで？ちよつと用事があるだけやし、邪魔やないで〜」  
能天気すぎるスペインの言い分に、まともに伝わらない事を

頭では分かっている、苛立ちが増幅するばかりだったロマ  
ーノは、両腕で頭を抱えなくなった。

『行かねえ！つてんだろースペインのアホー！』

言い捨てにも近い叫び声を叩きつけたロマーノは、そのまま  
派手な音を鳴らしながら受話器を叩き降ろした。

通話をぶった切られたところで、自分の複雑な感情など、  
まともに読み取れた事のない鈍感な親分には、疑問しか残  
らず、無機質な機械音しかしなくなった受話器を、のんび  
りした仕草で戻していく。

「…なんで怒るん？」

意味が分からないと言いたげに、電話に問いかけてみたど  
ろで答えが返ってくるはずもなく、よく分からないが、また  
怒らせたと言う事だけは理解した。

しかし、それはいつもの事でしかなく、元気そうな声を聞け  
ただけで十分だったスペインが、何気なく時計に目を向けた  
途端、それさえも別の思考に押し流されていく。

「あかん！も〜こんな時間やんっ」

予定を過ぎている時刻に慌て始めたスペインは、クロケッタ  
をもう一つだけ口に放り込んでから、残りを冷蔵庫に放り

込む。

口元を動かしつつも上着を引き寄せたスペインは、そのまま  
王宮に向かって走り出した。

明日までの書類だけでも終わらせないと、予定も大きく変  
わってしまう。

提出用の書類だけでも、前もって終わらせとけば良かったと  
考えたところで、後の祭りでしかなく、次に帰宅出来たのは、  
深夜を回ってからだった。

翌日。

昼すぎにオーストリアの家を訪問したスペインは、自分以外にも客がいることを知った途端、浮ついていた気持ちだが、急降下していくのが分かった。

「スペインじゃねえ〜か！ すぐえ〜久しぶりだなう〜！」

悠然とコーヒーを飲んでいる家主より、我先にと声をかけてくる人物に、思わず押し黙ってしまったスペインは、そのまま聞かされていないフリを徹する事にした。

「オーストリア、来たつたで〜♪」

陽気な笑みをオーストリアに向けるスペインに、思わず顔を引き攣らせたプロイセンだったが、それを気にする素振りも見せない。

そんな対応も見飽きているオーストリアも、何もなかったように単調に応えるだけだった。

「コーヒーを淹れますね」

片手で勧められるまま、椅子に腰をかけたスペインは、目の前にいるプロイセンを、空気のように扱いつける。

しかし、意図して連れて来なかったワケではないが、他に客人がいるくらいなら、ロマーノを引っ張つてくれば良かったと

思い耽る。

必死に視界に入ろうと忙しく動き始めたプロイセンが、更に鬱陶しさに拍車をかけ、スペインは欠伸を混じりの眩きを零した。

「久しぶりに出てきたら、疲れても〜たわ〜！」

「その程度で疲れるなんて、鍛え方が足んねえ〜証拠なんだぜ〜ケ〜セツセツセツ〜！」

目の前でバカ笑いをするプロイセンに、ゆつくりと目を眇めたスペインが、鷹揚のない声を漏らしたのは、数秒後の事だった。

「あ〜、どちらサンやつたつけえ〜？」

瞬く間に悲痛な顔を浮かべたプロイセンが、1人でいじけ始めた姿を目にしつつも、スペインは他人行儀に近い笑顔を決やす事はなかった。

「苛めるのも程々になさい」

諦観じみたため息と共に苦言してくるオーストリアに、大仰に肩を竦めたスペインは、諦めたようにプロイセンに目を向ける事にした。

「ハイハイ、プ〜たんは今日も元気なんやね〜」

面倒くさいと思いつつも、ようやく呼びかけたスペインに、歓喜のあまり破顔したプロイセンだったが、平坦な声が反対側から降ってきた。

「ところで、プロイセン、今日は何しに来たのですか？」

真顔で尋ねられ、再び押し黙る羽目になったプロイセンは、驚嘆の顔から涙目に代わっていく過程が、手に取るように分かった。

震える身体で力なく立ち上がるプロイセンを他所に、スペイン達は、再び話しかけるわけでもなく、のんびり成り行きを見守るだけだった。

「くっそお〜！お前ら後で覚えていやがれえ〜！」

ついに耐え切れなくなったプロイセンが、泣きながら戸口に向けて走り去っていったが、それさえも、のんびり見送っているだけだった。

完全に足音がかき消された頃、オーストリアに視線を戻したスペインは、呆れた声を向けていく。

「お前かて、大概ヒドいやん…」

啞然と見送り続けていたオーストリアは、スペインへ視線を戻した途端、目を白黒させながら言い始めた。

「え？何か変な事を言いましたか？」

「こまでくると、天然も罪だと思えなかつたスペインだったが、敢えて訂正する気も起きなかつた。

「まあ、ええんとちやう？プ〜やし…」

「…そ〜ですか？」

あまり納得はしていない物言いではあつたが、それでも追求してこないのは、気にしていない証拠である事も知っている。

だからこそ、プロイセンの話題を打ち切る事にしたスペインは、持参してきた書類を、オーストリアに差し出した。

「頼まれてたヤツつてこれやんな〜？」

「ああ、ありがとうございます、確認しますね」

何もなかつたように書類に目を通し始めたオーストリアは、やはり先程の事にこだわっていないように見える。

多くを語らなくても、ある程度なら理解が出来る相手がいるのは、とても幸せな事だと思えたスペインは、柔らかな笑みを浮かべた。

穏やかな空気に目を細めたまま、一昔前に戻つたような感覚に囚われたスペインは、懐かしむように遙か昔を思い出していった。